



大江戸 美人揃

落書福太郎

九代将軍、家重執政の宝暦二（一七五一）年 桜の咲く頃。浅草寺地内に湊屋という『ごふく茶屋』を称した水茶屋があった。ここでは湊屋をごふく茶屋と呼ぶことにする。ごふくとは、御仏供からきたもので、‘仏前に献茶して仏果を得る’という意味である。ごふく茶屋には奥座敷が設けられてはいるが、他の店とは違い私娼窟ではない。お茶を飲ませるのを目的としていた。この店では、熱い湯でまず桜湯、麦茶を出した。浅草寺の鐘が、昼八ツ（午後二時）を打ったごふく茶屋では、おろくという娘が、客にお茶を運んでいた。

「ありがとう。おろくちゃんの入れてくれるお茶は天下一品だ」薬問屋の若旦那の田助が言った。

「また、若旦那、冗談がお上手ですね」と、おろくは言いながら他の客にお茶を運んで行った。

「おろくちゃん、相変わらずきれいだね」と、大工の留吉は言った。

「ありがとう」と言って、おろくは外に出た。そして、

「ごふくの茶、参れ、参れ。」と、浅草寺参りの人々に声をかけた。

「松さん、いらっしゃい」おろくは一人の客を店の中に案内した。棒振の松太郎であった。そして、勝手場に戻り、おとつあんが入れた宇治の茶を客たちに運んだ。一刻（二時間）が過ぎ、客たちも帰り店を閉める時間になった。「おろく、片づけはおとつあんとおっかさんがやるから湯屋に行っておいで」と、母親のフミが言った。

「早く行ってきな」父親の太郎も言った。

「おとつあん、おっかさん、お疲れ。じゃ、湯屋に行ってくるよ」と、湯の道具を持って、弁慶縞の小袖を着流し、おろくは出て行った。しばらく歩いていると、後ろから、

「おろくさん、湯屋へ行くのかね。」と、棒振りの松太郎。

「あら、松太郎さん。こんばんわ」

「おらあも、湯屋へ行くんで、一緒に行こう」そして、二人は湯屋に入って行った。松太郎は、烏の行水ですぐに出てきて、二階に駆け上がり、「こんばんは」と、挨拶をした。隅のほうでは、薬問屋の若旦那の田助が、金物屋の平吉が酒を酌み交わしていた。

「おお、松さんこっちにきて、一局やらないか」と、太助が手招きをした。

「はいよ、若旦那たち、今日は早いですね」

「いや、ちょっと前に来たばかりですよ、ねえ平吉さん」

「そうですよ、ちょっと前に来たばかり」

「松さん、何か嬉しそうじゃないか」と、田助。

「さっき、湯屋へ来る途中、おろくちゃんに会って、一緒にきたもんで」と、松太郎は嬉しそうに二人に言った。

「それはうらやましい」と、田助は松太郎を嫉妬しているように、言った。この田助も松太郎もおろくに一目ぼれしてしまい、毎日のようにごふく茶屋に通っていた。そして、田助と松太郎は、酒を飲みながら将棋を指し始めた。半時ほど経った頃、おろくは上がり場で鏡を見ながら髪を結っていた。今日は、櫛まきに仕上げた小袖を着た。櫛まき髪とは、櫛を逆さまにまき込んだ

髪型で粋な髪型である。

（さあ、帰ろうかな）おろくは、出口に向かった。そばにいた男たちだけでなく、女たちもおろくに見惚れた。おろくは、ほんのり頬が湯で桃色に染まっていた。（さっぱりしたわ、早く帰って、おとつつあんとおっかさんも、湯屋に行ってもらわないと）と思いながら、皆に頭を下げて出口に向かった。着替えている人々は、うっとりしながらおろくを見つめていた。

「おろくちゃんは、相変わらずきれいだね。湯上りは、ますます色っぽくなるね」

「あの髪形、しゃれているね。今度真似してみようかしら」女たちの囁き声が聞こえてきた。

「お婆ちゃん、ありがとう」番台の女に声をかけて、おろくは湯屋を出た。西の方の山々は、朱色に染まり始めていた。道に造られた行燈に、すでに灯が入っていた。夜風が、爽やかに柳をなびかせながら、おろくを通り抜けて行った。

「おろくちゃん〜」もうすぐ家だという所で、声を掛けられた。振りかえると、息を切らした田助が一間ほど後ろにいた。「あら、若旦那。どうなされたんですか」

「夜道は危ないから、家まで送って行きますよ」

「松太郎さんと一緒じゃないんですか」

「松さんは、平吉さんと未だ二階で飲んでます」

「二人ともお酒好きなんですね」と、おろくは、田助のほうを向いて言った。田助は、今年は忍が岡の花見に、是非おろくを誘って行きたいとずっと思っていたので、今夜が誘いの機会といつ言おうかと考えていた。忍が岡は、現在の上野公園界限である。おろくの家近づいた時、田助は心臓が高鳴るのを振り切って、

「おろくちゃん、今度の休みに、‘忍が岡’に花見に行かない？」と、なんとかおろくに聞こえる声で言った。

「うーん、ちょっと考えさせてください。田助さんが今度お店に来た時に、返事します」

「おろくちゃん、じゃ明日お店に行くから」二人が話に夢中になっているうちに、かおろくの家に着いた。

「ただいま」「お帰り」

「おっかさん、若旦那に送ってもらっちゃった」奥から出てきたフミに小声で言った。

「若旦那、いつも、いつもありがとうございます」フミも声を落として言った。おろくの父、太郎は、おろくに変な虫がつかないか心配で、おろくが連れて来る男にはめっぽう厳しく当たることで有名であった。ましてや、夜酒を飲んでいる太郎はなおさらなのである。そのため、フミは、田助が来たことを太郎に知られないようにしたのであった。

田助も、そのことは十分知っているもので、小さな声で「おやすみなさい」と言って、二人に別れを告げ帰った。

「おーい、誰か来たのか？」居間から太郎が怒鳴った。

「おろくが帰って来たんですよ」

「おとつつあん、ただいま」

「おー、遅かったな」

「おとつつあんとおっかさん、湯屋へ行ってきたら」数日後、おろくと田助は、忍が岡にいた。

おろくは、腰折れ島田の髷（髷の真ん中の元結で締める所がくぼんでいる髪型）を結って花簪を挿し、青海波（せいかいは）模様の入った小袖に柿色の綸子（りんず：滑らかで光沢がある絹織物。）の帯を吉弥結びにしていた。吉弥結びは、一丈二尺の帯を後ろで片結びするもので、歌舞伎役者女形の初代上村吉弥の考案によるもののようである。人混みの中なのに、すれ違う老若男女たちは、おろくの美しさに驚き、見とれていた。田助は、意識せずにはいられなく、緊張しながらも、誇らしく歩いた。二人が、寛永寺の山門吉祥閣を通り過ぎた時、清水堂の山裾の桜が目の前に広がった。

「桜もきれいだけど、おろくちゃんはもっと綺麗だよ」と、照れながら田助は言った。半時（一時間）ほど二人は歩いた。

「若旦那、ちょっと休みませんか」と、おろくが疲れた顔で言った。

「疲れましたね」と、田助も言った。そして、二人は不忍池の畔にある水茶屋に入った。

「いらっしゃいませ・・・」店の女は言って、おろくをまんじりともせずに見入った。

「あっ、すみません」と言って、水辺に近い席に二人を案内した。すぐに、女は茶を運んできた。

「おろくちゃん、お腹すいていない」

「ええ、ちょっと」女が、行こうとする時に、田助が聞いた。

「おねえさん、何か食べるものないですか」

「穴子の天麩羅でめしか蕎麦です」

「おねえさん、天麩羅とめし。あとお酒三合、頼みますよ」二人は、食事を取った。時を忘れて、二人は話しすぎたいつの間にか、茶屋は、夕暮れに包み込まれ始めていた。田助は、酔いが回った勢いで、奥座敷を頼んだ。女が来て、二人を部屋に案内した。こんな部屋に通されたことにおろくは、驚き困った。仕事柄、このような場所に案内される人たちは目的が別なところにあることを知っていたが、ここまで来たら、今更、女にどうのこうのとは言えない。田助は黙っているし、おろくは、早く帰ることばかり考えていた。案内した女は、お茶を取りに出て行った。それから二人は、しばらく黙って座っていた。

変な雰囲気にならずに、「このお店、きれいですね」と、おろくは言った。田助は胸の鼓動が高まって来た時、女がお茶を運んできて、二人の前に置いた。

「何か御用があれば、呼んでください」と言って、すぐ部屋を出て行った。

毎日、おろくは目が回るくらい忙しかったが、あれから田助とは、目立たないように逢瀬を重ねた。数か月後、おろくの体調に変化が出てきた。

「おろく、最近食べ物に好き嫌いを言うようになってきたけど、どうしたんだね」

「いや、そんなことはないわ」おろくは、ドキリとした。田助に、そのことを伝えそして、

「もしかして、若旦那の子供ができたかもしれないわ」

「子供ができたって」と、田助は驚き、しばらくして我に返って、喜んだ。

「若旦那とあたしの子供だよ」

「そうだ、はやく親に言わないと」

「早く祝言も挙げないと。今日帰って、おとっつあんとおっかさんに言うよ」

「私も、言う。きっと許してくれると思うよ」 田助は帰って、両親におろくと結婚すると話した。

「水茶屋の娘だと、絶対許さん」と、田助の父、仁吉は言った。

「許してくれないなら、俺は家を出る」と、わめいた。

「ばかなことを言うな、家を出てどうするんだ。お前に何ができるんだ」 田助の母、お吉はただ泣いているだけだった。 おろくは、母親のフミに田助の子供ができたことを伝えた。

「なんだって、おろく。冗談を言いでないよ。若旦那の子供だって」

「おっかさん、本当なんだよ」

「こんなこと、おとっつあんに言ったら勘当されちゃうよ。相手先とは月とすっぽんなんだから」

「おっかさん、どうしよう。」と、泣きながらおろくは言った。「いいよ、おとっつあんにはあたしから言ってみるよ」 夜も更けて、行灯の灯も、消えそうになってきた。

「おろくのお腹に、薬問屋の若旦那の子ができたんだって」と、フミが言った。

「なんだって、そんなバカな」

「本当なんですよ」

「おっかあ、どうしたらいい」

「あんた、おろくにはかわいそうだけど、私の実家にあずけましょう。ほとぼりが冷めるまで。子には罪が無いからね」 翌日、おろくは、フミの祖父母オタカと直助の家のある川越にフミと一緒にいった。フミは、川越の実家について、お茶一杯飲んでから江戸へ引き返した。おろくがいなくなった‘ごふく茶屋 湊屋’は日を追うごとに客が減った。田助は、あれから姿を一度も見せなくなった。金物屋の息子の平吉、大工の留吉そして、棒手振りの松太郎は毎日のように来て、おろくのことをフミに聞いた。

「おろくちゃん、どこに行ったんですか」 フミはただ笑顔を作るだけだった。今日も留吉が店を閉めるまで茶を飲んでいて、フミは、留吉のところに数杯めのお茶を運んだ。

「おろくちゃん元気になっていますか。一体どこに行ったんですか」

「留吉さん、おろくのこと心配してくれてありがとう。おろくは若旦那の子を孕んでしまったの。でも、田助さんとおろくの結婚は、あちらさんもこっちも大反対だったんですよ。だから、おろくを実家に行かせたんです」

「おろくちゃん、かわいそう」

「おろくちゃんのお母さん、おろくちゃんのいるところを教えてください。お願いします」 留吉は頭を下げた。

フミも根負けした。秋も深まって来たある日、留吉は、やっとう棟梁から許しを得て、三日間休みを取った。七ツ刻（朝四時）、川越街道を北に向かった。江戸～川越まで十一里（約四十四キロメートル）、留吉は、板橋宿、上板橋宿、下練馬宿、白子宿、膝折宿、大和田宿、大井宿と通り過ぎ、川越宿に入った。陽が暮れ始めていたのにもかかわらず、人の多さに驚いた。（此処まで来れば、もうすぐ会えるぞ。ここでゆっくりして、明日早くから探してみるか） 留吉が、ほ

とした時、

「おにいさん、泊まっていてよ」 客引きの女が、留吉の左袖をつかんだ。 向かいの店の女が、走ってきて、右腕をつかんだ。

「うちに泊まってよ」

「はなせよ」留吉は、大声で言った。

「おにいさん、早く決めてよ」

「分かった。お前のところにするぜ」 左袖をつかんだ女に言った。女は、留吉を店の上り框に座らせ、タライを持ってきて留吉の足を洗った。洗い終わると、座敷にいた女が「こちらへどうぞ」と言って、留吉を部屋に案内した。

「お客さんです。よろしくお願ひします」女は、障子をあけて、すでに泊り客のいる部屋に留吉を促した。浪人風の男と商人の二人が、なんやら話をしているところであった。

「よろしくおねがいします」留吉は、軽く会釈をして、座った。

「職人さんかい」商人の男が言った。「へい、家職人の留吉と申します」「大工か」浪人風の男が、口をはさんだ。

「某、城崎又の助と申す。よろしく」

「あたしは、酒屋問屋の太助といひます」

「留吉さん、これからどうされるんで」

「どうするって、なんですか」

「あたしたちは、これから川越の夜を満喫するために出かけるんですよ」

「おぬしも、一緒に行かぬか?」「いや、あたしは明日朝が早いもんで。申し訳ありません」

「そうか、じゃ悪いが出かけてくる」二人は、いそいそと出かけて行った。

しばらくすると、女がやってきて、風呂にするか飯にするかと聞いてきた。留吉は、風呂に入って、飯を食べた。「お客さん、食べ終わったらどう」女が、色目を使った。飯盛り女、と言われる類の女であった。行燈の淡い暗さが、女を引き立てていた。一瞬、留吉は戸惑った。旅の恥はかき捨てと思う一方、おろく会いたさにやってきた気持ちと留吉の心は、葛藤した。

「いや、今日は疲れているんで」と断った。朝六ツ半（七時）に留吉は、朝陽が障子を白く映し出し時に目が覚めた。部屋は、酒臭かった。二人は、まだ寝ていた。留吉は、一階に下りて、飯を持ってくるように女中に頼んだ。粟飯と具が茸の味噌汁そして香の物を食べて、五ツ（八時）に、宿を出た。そして、二刻（四時間）ほどかかってやっと、宿場はずれの村のおろくのいる家の前に着いた。（やっとなつたな、ここか）留吉が、垣根越しに家を覗いた。おろくが、庭先で洗い物を干していた。春信風島田を結び、麻の葉小紋に赤い襷を掛けた姿は、秋の日差しを受けて留吉の目には、おろくが観音様のように輝いて見えた。おろくが、留吉に気がついた。

「留吉さん、留吉さんじゃないの」

「おろくちゃん、元気そうじゃねえか。良かった、良かった」涙が、出そうになった。

「おろく、だれか来たのか?」と、祖母のオタカが出て来て、おろくに言った。

「おばあちゃん、留吉さん。江戸から来てくれたんだ」 嬉しそうにおろくは、オタカに紹介した。

「おお、ごくろうなことじゃ、上がってお茶でも飲んでくれ。おろく、後でいいから留吉さんとやらにお茶を入れてあげな」「はい、留吉さん、上がって待っていて」 おろくは走って、家の中に入って行った。

「おばあさん、この子はおろくちゃんの子供ですか？」 留吉は、オタカが抱いている子を見て言った。

「そうだよ、かわいいだろう」 おろくに似て、目元がすっきりして利発そうな顔をした女の子であった。「どうぞ、遠慮せずに中に入って下せい」 オタカは留吉を家の中に案内した。

留吉は、おろくに会える日を一日千秋の思いで待っていたのだが、おろくの子を見たら急に心に迷いが生じた。

「早く上がりなせい」と、催促の聲がかかったので、留吉は迷いを払しょくして床に上がった。囲炉裏に近づくと、おろくの祖父の直助が会釈をした。

「よく、来なされたな。まあゆっくりしろや」 複雑な顔をして言った。

「おじゃまします」 留吉は、腰を下ろした。

「わざわざ、江戸からおろくに会いに来てくれたそうだな」

「はい、おろくちゃんが急にいなくなったもので、心配で」

「留吉さんとやら、今日はゆっくりしていけるのか？」 直助は留吉の顔を覗き込むようにして言った。

「いや、はい。今日と明日は仕事が休みなもので、今日はこの辺の旅籠に泊まって明日帰ります」と、一瞬戸惑いながら答えた。

「そうか、それはよかった。ばあさんや、留吉さんと一杯やるから酒を」 勝手場に向かって、大きな声で言った。障子が、いつの間にか夕日で、薄赤く染まっていた。直助が、行燈に灯を入れた。そして、煙管に葉煙草を詰め、火をつけた。

「留吉さんは、どんな仕事してるんじゃ？」

「しがない家職人（やじょくにん）でさ」と、留吉は照れて言った。この時代は、江戸では大工のことを家職人とも言っていた。

「留吉さん、おろくのことどう思っているんだ。どこかの若旦那の子持ちだが」 さびしそうに直助が言った。

「はい、今でも好きです。おろくちゃんはどう思っているか分かりませんが」 留吉は、自信なさそうに言った。おろくとオタカが、酒と膳を運んできた。オタカとおろくの膳も運んできた。膳には、粟飯と香の物、卵そして、川魚が載っていた。そして、囲炉裏の自在鉤に山菜や猪の肉が入った鍋を掛けた。

「卵は、うちのだ。魚と猪は、爺さんが捕って来たんだ。召し上がれ」 オタカが、勧めた。暮れ七ツを打つ鐘の音が、近くの寺から聞こえてきた。

「おじいちゃん、今日は十五夜だよ。おばあちゃんが朝、すすきを取ってきてくれたんだ。縁側に生けたよ！」とおろくが、直助に嬉しそうに言った。

「だんごはどうした？」と、直助はオタカに聞いた。

「朝から、おろくと作りましたよ。もう供えましたから」と、オタカ。この時代は十五夜の供え物は、すすきが十五本または、五本と米粉の団子か饅頭が決まりだったようだ。留吉は、そんなおろくを見て、愛おしさが胸にこみ上げてきた。

「そう言えば、今日は深川の富岡八万様のお祭りだな」と、やっとの思いで話に入った。

「そう、深川のお祭り、賑わっているんでしょうね」おろくは懐かしそうに留吉のほうを向いた。食事も終わり、オタカとおろくが片づけを始めた。オタカが、留吉の膳を片付けるとき、「留吉さん、今日はうちへ泊まっていきな」と言った。「・・・・・・・・・・・・・・・・」 「留めさん、好きなようにしとけ、俺はもう寝るだ、お先に」言いながら、直助は部屋を出て行った。オタカも片づけが終わって、「おらも、寝るゆっくりして行って下さいよ」と言って、部屋を出て行った。おろくは、縁側に出て、月を見ていた。留吉も縁側の後ろに座った。おろくの横顔を見ているだけで、切なくなってきた。留吉は、間を持たせるために、懐から、煙管入れを出した。そして、煙管に葉煙草を詰めて、煙草盆の火をつけたおろくは、留吉に気付かずに、ずっと月を見ていた。

（若旦那、元気にやっているかな・・・・）月に雲がかかり始めた時に、おろくの頬に一筋の光った涙が流れた。留吉は、しばらくしてから、おろくに話しかけた。

「おろくちゃん、月がとっても綺麗だね」

「留吉さん、今日はありがとう」二人はそれぞれ何かを言わなければと思いつつも、ただ二人は黙って月を見続けていた。

「若旦那、どうしているかしら」

「田助さんは先月、金物屋の平吉さんの妹と結婚したよ」おろくは、留吉に悟られないよう声を抑えたが、涙は止めどもなく流れた。留吉はなすすべもなく、そっと、おろくから離れた。おろくは、半刻（一時間）ほど、泣き崩れていた。月の明かりが、その間照らし続けていた。

留吉は、朝六刻（六時）目を覚まし、顔を洗いに井戸に出た。

「おはようございます」オタカが、大根を洗っていた。

「寝むれたかね」

「はい」顔を洗って、留吉は居間に行った。直助が、炉辺で煙草を吸っていた。

「おはよう、寝れたかね」直助は、煙管を手にとって言った。留吉も挨拶を済ませて、直助の横に座った。

「留吉さん、おはよう」おろくが、煮えきった鍋を囲炉裏の自在鉤にかけた。そして、オタカが、膳を運んできた。「召し上がれ」大根の入った鍋から椀によそって、留吉に渡した。目をはらしたおろくは、こまめに留吉の膳の世話をした。

「留吉さん、汁のおかわりはいかが」と、無理矢理、おかわりをさせた。おろくは、これが留吉との最後の別れになるかと思うと、居てもたってもいられずになんとか、留吉の出立を延ばすよう振舞った。留吉は、おろくはまだ田助のことを思い続けているのだと思い込んでいたので、諦めて、一時も早く江戸に帰りたかった。その二人の様子を見ていて、直助もオタカも痛々しく感じていた。「留さん、もう帰るかね」と、直助は寂しそうに言った。

「仕方がないね、留吉さんにも仕事があるんだから」と、オタカは肩を落として、残念そうにおろくの目を見て言った。「おろくの両親に、おろくと子は元気だと伝えてくれや。留さん」と、直助は元気を振り絞って言った。

「承知しました。では、これで失礼しやす」直助、オタカそして、おろくに挨拶をして留吉は、江戸に向かって歩き出した。明け六ツ（朝六時）頃であった。留吉は元気がなく四半刻（三十分）ほど歩いた時、留吉さんと言っている声が聞こえた。後ろを向くと、子を背負ったおろくが手を振っていた。そばにいたオタカが、背中に籠を背負って、土産だと言って留吉に向かって歩いてきた。留吉もオタカの方に行った。「あんた、この籠しょって行って。大した土産じゃないが」留吉は、大根や葱が入った籠を背負ってオタカに礼を言った。おろくもいつの間にかそばに来ていた。「おろくちゃん、元気で」「留吉も」留吉は、おろくとオタカに頭を下げて、二人に背を向けた。

「おろく、これでいいのかい」

「・・・・・・・・」

「自分に正直にいな」オタカが、おろくの背を押した。

「留吉さ～ん」オタカの目がかすんだ。青く澄んだ空に、おろくの声がひびきわたった。二羽の鳶が、啼くのをやめて旋回していた。オタカは、いつまでもおろくたちを見送っていた。

（完）

明和五（一七六八）年秋、おろくの話の十七年後である。江戸の外れ谷中の笠森稻荷の水茶屋'鍵屋'に一人の武士が、入った。この侍、太田南畝と言ひ、十九歳で幕臣として御徒（歩兵：將軍が外出するとき乗り物の前後左右の警古にあたり、平日は、要所の持ち場に詰めるのが仕事で、七十俵五人扶持の薄給）を務めていた。幼少の時は、盛んな知識欲そして、異常なほどの記憶力に皆は、南畝を神童と言っていた。今は、独学で和漢の故事典則を学び、江戸風俗に通じまた、狂歌にも長じていた。娘が茶を運んできた。

（お、なんて美しい娘なんだろう）南畝は、見とれてしまった。この天才男、生まれてはじめて一目ぼれをしたようだ。茶を何杯か飲み、腹がいっぱいになった。客が席を求めて、待っているのに気づき、南畝は、未練を残し店を出た。

（春信さんに、教えてやろう）南畝は、知り合いの浮世絵師鈴木春信（四十四歳）の住んでいる神田白壁町の家に行った。こんにちわと言って、返事も待たずに腰高障子戸をあけて、入っていった。

「南畝さんかい」春信は、返事をするも、筆を休めずに役者の錦絵を描いていた。それにもかかわらず、南畝は、一気に水茶屋の娘の話をした。春信は、いつの間にか筆をおいて南畝の話をじっと聞き始めていた。

「そんな美人かい」

疑り深そうに、南畝を見た。

役者の錦絵に飽きてきた春信は、翌日さっそく笠森稻荷に出かけて行った。茶屋は繁盛していた。縁台に座ると、しばらくして、茶を娘が運んできた。春信は一目見て、その娘に魅かれてしまった。

「娘御、名前は？」と、春信は居てもたってもいられずに聞いた。

「お仙と、申します」と、その娘は鈴を転がしたような声で答えた。この時、お仙、十八歳であった。お仙は色白で、うりざね顔そして、涼しげな眼をしたしなやかな体つきをしていた。燈籠鬘・島田髷を結って、大小あられの小紋の小袖が良く似合っていた。長い時間が過ぎていた。陽が傾き始めていたのに春信は気付いた。

（こんなに居たのか）結構な金額になっていた茶代を払い、春信は、鍵屋を後にした。家に帰っても春信は、お仙のことが頭から離れない。なんとか絵にできないかと考えていたときに、同じ町内に住んでいる平賀源内（四十歳）が訪ねてきた。

平賀源内、享保十三（一七二八）年、讃岐の高松藩下級武士の家に生まれた。若き頃より本草学を学ぶとともに、長崎でオランダの科学も学んだ。そして、今から十一年前に江戸に来たのだが、主家から暇を出され浪人の生活を送っていた。この時代は十代將軍徳川家治の執政の元、田沼意次が積極的な経済政策を推し進めており、江戸は文化も栄え、活気に溢れていた。学問では、蘭学が興り、文学方面では、川柳、狂歌、黄表紙、洒落本などの風俗や人情を書きつづった大衆小説も盛んになっていた。また、芸能面では歌舞伎においては二代目瀬川菊之丞が女形で人気を集めた。また、江戸浄瑠璃も流行った。美術の世界、特に浮世絵では、二、三色摺りによ

る木版画紅摺絵を何色も重ね摺る東錦絵へと飛躍した。この時、中核にいたのが源内で、彼の周辺には南畝や春信らの多くの文化人が集まっていた。

「源内さん、笠森稻荷の水茶屋にお仙という娘がいるんだが、めっぼう美人で驚いたよ」と春信は、言った。

源内は翌日、笠森稻荷に行って、お仙を見てきて、春信の家に昼ごろ訪ねた。

「春信さん、俺もお仙さんに一目ぼれだ」と嬉しそうに言った。

高障子戸が開き、こんにちわと南畝が入って来た。

「源内さん、この間発明した‘タルモメートル（寒暖計）’売れましたか？」と、早速南畝は聞いた。

「まったく、皆信用してないのか、不思議そうに見るだけで買い手がつかないんだよ」と、苦笑いした。

「今、源内さんと、美人の娘さんを江戸町民に売り込もうかと話をしているのだが、誰がよいかと悩んでいるんだ。今候補に挙がっているのは、浅草の茶屋蔦谷のお芳さん、浅草寺裏の楊枝売りの本柳屋仁平次の娘お藤さんそして、南畝さんが見つけてきた笠森稻荷の水茶屋鍵屋五兵衛の娘お仙さんの三人なんだが」と、春信はいっきに話した。南畝は、

「お仙さんは磨かずしてきれいに容をつくらずして美人です、また、お藤さんは玉のような生娘とはこの方を言うのです」と、南畝は二人を誉めあげた。

「南畝さん、それではどちらの娘さんにするか決まりませんかね」と、源内は笑いながら南畝を見た。

しばらくして、春信が

「お藤さんは外見を飾って美しく見せているが、お仙さんは地で美しいのでお仙さんを私は描きたいのだが、どうだろうか」と、二人に言った。

「お仙さんに決まりだ」と、源内は言った。

「では、私はお仙さんの登場する作品を書いてみます。また、源内さんすみませんけど、去年の‘寝惚先生文集’と同様に序文を書いていただけませんか」と、南畝は源内のほうに向かって頭を下げた。

「承知した。春信さんにお願いだが、南畝さんの作品にお仙さんの錦絵を挿絵として入れてもらえませんか」と、今度は、源内は春信に向かって言った。

源内は、気鋭新進作家の太田南畝の将来を期待していたので、なんとか自分も力になってやりたいと常々考えていた。南畝は一瞬驚いたが、すぐに春信に向かってそして、源内にも頭を下げた。それから、十日間ぐらいの間、三人はそれぞれお仙のところに足繁く通った。春信は、その翌日に行った。相変わらず鍵屋は混んでいた。座る場所があくまで、外で待っていた。しばらくして、席が空いたので縁台に腰をかけた。すぐに、お仙が茶を運んできた。春信はここぞと、お仙に声をかけた。

「お仙ちゃん、私は、鈴木春信という絵描です」と名を名乗り、春信はお仙を絵に載せたいと、言った。

「おとつつあんと、おっかさんに相談してみます」と、お仙は顔を赤らめ答えた。

その日は、返事をもらえずに、春信は帰った。

二日後、春信は昼過ぎにお仙に会いに行ったところ、お仙は家の奥に春信を案内した。お仙の父親五兵衛が出て来た。

「春信様、お仙をよろしく願います」と、五兵衛は頭を下げた。

「こちらこそよろしく願います」と、春信も丁重に頭を下げた。それから、店が混んでいるので、細かい話は翌日の朝空いている時に来るからと言って、春信は茶屋を後にした。そして、春信は、そのまま源内の家に行った。源内の家には、南畝も来ていた。さっそく、二人に、お仙たち一家が、喜んで話を承知してくれたことそして、細かい話は明日する予定であることも伝えた。

「春信さん、良かったですね。これから忙しくなりますよ。私も、お仙さんに会っていろいろ話を聞いて文を書きます」と、南畝が嬉しそうに言った。

「春信さん、最初はどのような絵の構成にしますか」と、源内は嬉しそうに聞いた。

「今、大店のご主人から見立絵を頼まれていますので、見立絵にしたいと思うのですが、どんな見立絵がよいのか悩んでいます」

見立絵とは、簡単に言うと、古典的な画類を当世風に描いたもので‘雅’から‘俗’への変容を表す言葉である。春信は謡曲の内容と関わりある絵の構成について、二人に相談した。

「蟻通（ありとおし）’でどうですか」と源内は、言った。

「どういう謡曲なんですか」と、南畝が聞いた。

「話はこうです。紀貫之（平安前期の歌人で、古今和歌集の撰者として有名。また、『土佐日記』の作者、）が玉津島参詣のため蟻通神社まで来ると、俄に日が暮れて大雨となり、乗馬さえ倒れてしまいます。途方に暮れていると、年老いた宮人が現われ、この処は物咎めをする蟻通明神の境内であるから、そうと知って馬を乗り入れたのであれば、命がないと言われます。貫之が名を告げると、それでは和歌を詠じて神慮を慰めなさいと言われ、そこで‘雨雲の立ち重なれる夜半なればありとほしとも思ふべきかは’と詠じると、宮人は感心し自分が蟻通明神である由を告げる。・・・という謡曲です。和歌の徳を讃えるのを目的とした曲です。また、シテの宮人が傘と燈籠を持って現われるのも珍しいと言われていています」と、源内はいっきに説明した。この中に出てくる蟻通神社は、現在大阪府泉佐野市に現存しているが、筆者は残念ながら行ったことが無い（単身赴任で大阪にいた時に行っておけばよかったと思ったが、良く考えてみるとその時はこの話を残念ながら、全く知らなかったのである。話を戻そう。

「源内さん、それで行きましょう。下絵を考えてみます。またできたら来ます」と喜んで、春信は帰って行った。

春信からお仙についての細かい話を聞いた後に、南畝も頻りに鍵屋に行き、長い間お仙の仕草や対応を観察した。それから、長屋に帰って、お仙のことについて、書いては書き、そして、何度も書き直した。九月の末にやっとお仙について書き上げた。（やっどできた）南畝は、声を出して読み上げた。

「社前には参詣の人もなく、賽銭箱に投げ入れられる銭の音も無い。俄かにして一朶（いちだ：花の一枝）の紫雲下り、美人の天上より落ちて、茶店の中に。座するを見る年は十六七ばかり、

髪は縹子（しゅす）の如く、顔は瓜犀（うりざね）の如し。翠（みどり）の黛（まゆずみ）、朱き唇、長き櫛くし、低き履げた、雅素の色、脂粉に汚さるゝを嫌ひ、美目めもとの艶しな、往來を流眇（ながしめ）にす。將に去らんとして去り難し。閑にちゃだいの茶を供はこび、解けんと欲して解けず、寛く博多の帯を結ぶ。腰の細きや楚王の宮様ごてんふうを圧し、衣の着こなしや小町が立姿かと疑う。……一たび顧みれば、人の足を駐とめ、再び顧みれば、人の腰を抜かす」（これで良しとするか。この文の前に、春信さんの絵をいれよう。源内さんには、明日にでも読んでもらって、序文を書いてもらおう）南畝は、筆に墨をつけて、表紙に‘舳羅山人著 売飴土平伝（あめうりどへいでん）笠森お仙附’と書いた。ちなみに『舳羅』とは、嘘でたらめという意味で、南畝のこの本でのペンネームである。

四半刻、自分の書いた本を見続けた。一か月後の十月の初旬、春信は南畝の長屋に下書きを持って行った。その下書きは、激しい風雨に細い体をしならせて、宮へと向かっている絵である。鳥居を背景に、お仙が傘を掲げ、提灯を持っている。雨の夜、宮の前を通り過ぎようとした紀貫之を呼びとめた宮人をお仙の姿に置き換えたものであった。「春信さん、なかなか良いですね。お仙さんの目をもう少し切れ長にしたらどうでしょうか」と、南畝は指でさした。後に出る‘都風俗化粧伝’（みやこふうぞくけわいでん：江戸時代後期に出版された美容本には、『目は顔の中央にありて、顔の恰好を引き立てる第一は凜と強きがよい。然れどもあまり大き過ぎたるは見苦し。無理に細き眼にせんとて、目を狭めるのはよくない』と書かれている。春信と南畝がしばらく話していると、源内がやって来た。

「源内さん、できましたよ」と、春信は南畝の意見を取り入れた下書きを見せた。

「素晴らしいですね」四半刻で、三人は、この下書きを本摺りすることで意見が一致した。

十日後、春信は摺りあがった錦絵を持って、南畝の長屋を訪ねた。

「春信さん、美しく摺りあがりましたね。これはすごい。是非源内さんにも見せないと。一枚いただけませんか」

「源内さんと南畝さんの分です」南畝に二枚渡した。春信は翌日、笠森のお仙に出来上がった錦絵を持って行った。お仙の髪は、髷（たぼ）と鬢（びん）を大きく張り出させて、生え際や襟足が引き立ち華やいで、また、青い縦縞の小袖に赤い前だれを掛けて、なお一層体がすらり見え魅力的であった。髷（たぼ）とは日本髪を結った際の後頭部の部分の髪をまた、鬢（びん）は頭髪の左右側面の部分を指す。

「わあ、すごく綺麗。春信さん、ありがとうございます。おとつあんとおっかさんに見せてくる」と言って、奥に入って行った。

しばらくすると、父親の五兵衛と母親のタエが出て来て春信に何度も頭を下げて礼を言った。春信たちが、立ち話をしている間も客が絶えなかったので、春信は早々と鍵屋を後にした。出ていく春信を鍵屋の斜め前の路地から編み笠を被った侍が、目で追っていた。春信は、気付かず、錦絵を頼んできた版元の申椒堂（しんしょうどう）の主人市兵衛の所、日本橋北室町にこの絵を渡しに行った。市兵衛は、平賀源内、大田南畝の著作や杉田玄白らの‘解体新書’などの蘭学書を刊行した。そして、後年の寛政四年（一七九二）林子平の「三国通覧図説」発刊で、重過料の処分を受けた。

「春信さん、これはよくできている。本当に綺麗にできている」と、大満足のようにであった。春信は早々に、大店を後にして南畝の家に行った。春信は、次に出す錦絵の下絵を南畝に見せた。「春信さん、今度は江戸の町人に売れますね。これも良いです」と南畝がほめた。「これですか、すばらしいじゃないですか」と源内は驚いた。

この絵は‘団子を持つ笠森お仙’と名付けられた。後ろに鳥居、茶の縦縞の小袖を着たお仙が、右手に団子を持ち、体をやや左側に反らしひざ下から素足が覗いている姿が描かれていた。

「南畝さん、いるかい。源内だ」源内の声がした。

「はい、入ってきてください」

「春信さんも来ていたのかい、丁度よかった」と言って、

「南畝さん、‘売飴土平伝’の序文を書きました」と源内は、南畝にその原稿を渡した。

南畝は、しばらくその原稿を読んだ。

「源内さん、ありがとうございます」源内も笑みを浮かべた。

南畝は、原稿を置き、近くに置いてあった下絵を源内の前に置いた。

「源内さん、春信さんが挿絵を描いてくれましたよ」と南畝は嬉しそうに言った。

申椒堂から一ヶ月後、戯作‘売飴土平伝’が売り出され、当初予想していたよりも、順調に売れていた。

しばらくして、錦絵‘団子を持つ笠森お仙’も売り出されたが摺られていた二百枚は一日のうちに飛ぶように売ってしまった。お仙の評判は湯屋で広まり、男だけでなく町娘もお仙の恰好に夢中になった。一躍、お仙は今で言う‘江戸のファッションリーダー’にもなってしまったのである。春信は、お仙を描きたいが良い案が浮かばないので、南畝に相談を持ちかけた。

「春信さん、今歌舞伎が流行していますね。最も人気ある役者は女形の瀬川菊之丞です。この菊之丞をお仙さんと一緒に絵がいたらどうだろうか。人気がこれ以上出るのは間違いないと思いますよ」と、南畝は言った。

「なるほど、お仙さんと歌舞伎役者か。それは良い案だ」

数日後、春信は、出来た下絵を持って南畝に評価を仰いだ。‘笠森お仙と団扇売り’という題の絵である。絵の構成は、背景には赤い鳥居、お仙は当代一の人気歌舞伎役者瀬川菊之丞の定紋が描かれている団扇を手にしていた。売り物の団扇には、勝川春幸や一筆斎文調の役者絵をはったものを置いてあった。また、菊之丞を団扇売りとして描いていた。この錦絵は、爆発的に売れた。これによりお仙の人気も確固たるものとなり、お仙の絵は草双紙（挿絵がついたかな書きの読み物）、双六（すごろく）、読売（瓦版のこと）にのるだけでなく、手拭いにも染められた。

また、森田座ではお仙の狂言を歌舞伎役者の初代中村松江が演じ大当たりした。巷では、（向う横丁のお稲荷さんへ一銭あげてざっと拜んでお仙の茶屋へ腰を掛けたら渋茶を出した。・・・）

と唄われた。春信は礼を言い、南畝の家を訪れた。「南畝さん、売れ行きが凄いです」「町で、大評判ですよ。良かったですね」と南畝は嬉しそうに言った。「南畝さんのおかげで、もう版元は増刷でてんてこ舞いです。これ、些少ですけど」と言って、南畝の前に金子を差し出した。

南畝は未だ浪人のため、定期の収入が無く、春信の好意に感謝した。一方、相も変わらず鍵

屋に、お仙見たさで毎日、客が詰め掛けていた。その対応にお仙は忙しかった。お仙はあちらこちらから声をかけられるものの、浮いた話は一つも立たなかった。春信は、仕事が一段落したところで、お仙の顔を見に笠森に行った。

「お仙さんの人気、すごいですね。よかったですね」と、お仙に言ったところ、「春信さん、人気が出たのは嬉しいですけど、町に出ると皆がじろじろ見たり、声をかけたりで落ち着いて買い物も出来なくなってしまいました」と言って、仕事に戻った。

春信は困った。

(評判になってしまったら、役者と同じに見られるのはいたしかたないと春信は思うのだが、まだ若いお仙にとっては、いたたまれないことかもしれない) 春信は時間が経てば、評判になる前の生活に戻るようになると話をして、鍵屋を後にしようとした時、キャーとお仙の声が聞こえた。

町人風の酔っ払いが、お仙にからんでいた。

「少しぐらい触っても減るもんじゃありめえ」 お仙は、泣き始めた。「お前、外に出ろ」 編み笠を被った侍が、酔っ払いの腕を引っ張り外に連れ出した。

「てめ一、なんだ」「静かにしろ」酔っ払いの手を捻り上げた。

「いてえ、この野郎、覚えていろ」酔っ払いは、後ろも見ずに逃げて行った。

お仙が、侍の前に行き、礼を言って頭を下げた。侍は、礼には及ばぬと言って、立ち去って行った。侍の名は、倉地政之助。幕府旗本お庭番の役目で時々笠森観音界限を見回りに来ている。春信は、一部始終を見て、その場を去った。それから、春信はずうっとお仙の言った言葉を忘れることができなかった。

(俺がお仙ちゃんに迷惑をかけたんだ。取り返しがつかなくなったらどうしよう)

翌年の明和六(一七六九)年夏から仕事と精神的な疲れから、春信は寝込んでしまった。

その頃、南畝は、風来山人の作家名で‘放屁論’という評論を書き終わったころであった。放屁論の原文の出だしである。『にんじんを飲んで養生しながら、首をくくると言った馬鹿者もあれば、ふぐを食って長生きをする男もいる。たった一度のことで父なし子をはらむ下女がいるかと思えば、毎晩……』。南畝が忙しさから解放された九月、春信を尋ね、春信の痩せ細った体を見て驚いた。

「春信さん、御加減はいかがですか。仕事が忙しかったから疲れが出たんでしょう。この薬草を煎じて飲んで下さい、きっと元気になりますよ」和紙に包んだ朝鮮人参を枕元に置いた。

「南畝さん、ありがとう」後ろ髪をひかれるように、涙を抑えて南畝は春信の家を後にした。

源内の友人、杉田玄白に日毎診てもらっていたが、春信の容態はいっこうに良くなりならず明和七年に時は流れた。その二月、源内が春信の家の高障子戸をあけた。

「源内です、春信さん」源内が、框をあがって障子を開けると、既に、版元の申椒堂の市兵衛が、春信の寝ている横に座って話しかけていた。「春信さん、これは今までのお礼です、滋養を付けてください」そっと、十両を差し出した。浮世絵は、普通版で一枚、十数文(現代で数百円)であった。春信のおかげで、市部衛は数万枚も売ることができ、莫大な儲けを手にして

いた。

「市部衛さん」 源内が、声をかけた。

「源内さんじゃないか」

「春信さんは」

「また、眠ってしまいましたよ」

「だれですか」

「源内です、春信さん。笠森稻荷の鍵屋のお仙が見えなくなったそうですよ。かわら版では、【とんだ茶釜（お仙のこと）が薬かん（禿げた父親）に化けた】と書かれていました」と寂しそうに言った。

「源内さん、私悪いことをお仙さんにしてしまったんです。悩んでいたんでしょうね」 自分を責める春信のやつれた姿が、痛々しかった。

「いや、そんなことはないと思いますよ」（しまった、余計なことを言ってしまった）源内は、俯いてしまった。

「春信さん、早く治してください。春信さんの美人画を待っている人がたくさんいます」
数日後、南畝は鍵屋をのぞいた。客はわずかだった。その客の中に、あの笠を被った侍が、お仙の父親と話をしていた。侍は、南畝の顔を見ると頭を下げて、去って行った。南畝は、侍を見送り、床几に座った。しばらくして、茶を持ってきたお仙の母親に南畝がお仙の行くえを聞いたが、ただ笑っているばかりで相手にしなかった。毎日鍵屋に南畝は通った。そして、とうとうお仙の話を母親から聞き出した。そして、すぐに、春信の家に行った。玄白が、春信の前に座っていた。

「おお、南畝さん」

「玄白さん、春信さん」

「今夜が峠かもしれません」

「話しかけていいですか」

「はい」

「春信さん、聞こえますか」 春信は、目を開き首をかすかに振った。

「春信さん、お仙ちゃん、お嫁に行くんだって。良かった、よかった」 春信の目から涙が流れた。

三か月後、南畝、源内、玄白たちの介護もむなしく、明和七年六月十五日、春信は鬼籍に入った。南畝は、『東錦絵を詠ず』という狂詩で【忽ち東錦絵と移ってより、一枚の紅摺枯れざる時、鳥居は何ぞ敢て、春信にはかなわん。男女写しなす当世の姿】と詠たい、嘆き悲しんだ。

南畝は、酒に溺れた。しかし、天才肌の南畝を周りが放っておかなかった。申椒堂が、ある武士の娘を紹介した。話はとんとん拍子で進み、翌年の明和八年（一七七七）、二十三歳になった南畝は、その娘と祝言を挙げた。五歳年下の富原氏の末娘里与（りよ）である。お仙がいなくなって、数か月の間は、谷中界限だけでなく、江戸府内中で、お仙がなぜいなくなったか、いろいろうわさで騒がしかった。ある者は、静かな所へ失踪したんだとか、ある者は横恋慕にあって、殺されたとか、また、無理心中の噂も出ていた。南畝は、毎日の生活に追われていたが、

そんな話を聞くたびに春信を思い出した。

そんな噂をよそに、お仙は、桜田御用屋敷内にある仮親の馬場信富の家で花嫁修業をしていた。仮親の馬場家から幕府旗本御庭番倉地政之助へ嫁ぐためであった。この時代、町民から武家に嫁ぐためには、武家の仮親に養女にならなければならなかった。【御庭番は、享保元年（一七一六）に徳川吉宗が將軍家を相続した際、紀州藩において隠密御用を勤めていた葉込役を幕臣団に編入し、彼らを「御庭番家筋」として、代々隠密御用に從事させたのをはじめて、吉宗が幕臣団に編入した紀州藩士約二百名のうちの十七名を租とするものである。職制では大奥に属する男の役人のひとつで、若年寄の支配で、江戸城本丸に位置する庭に設けられた御庭番所に詰め、奥向きの警備を表向きの職務とするが、時に將軍の側近である側御用取次から命令を受け、日常的に大名・幕臣や江戸市中を観察し情報収集活動を行っていた。また、庭の番の名目で御殿に近くことができたので、報告にあたっては御目見以下の御家人身分であっても將軍に直接目通りすることもあり、身分は低くても將軍自身の意思を受けて行動する特殊な立場にあった】

政之助の倉地家は、十七家の一つで、初代 御家人文左衛門満房 二代 仁左衛門忠見で、その息子が三代目 政之助であった。文右衛門は笠森稻荷の大的信者で、感応寺から地面を借りて勧請したのがこの稻荷である。ある日、政之助は、御休息御庭の者支配として、谷中を見回っていた。夏の暑い盛り、政之助は汗だくで、笠森稻荷の前の茶屋の台に腰を落とした。店の中は混んでいた。しばらくして、お仙が、冷ました茶を運んできた。政之助は、編みがさの中からお仙を見た。（なんて、純朴な娘なんだろう）お仙は笑顔で茶を出した。政之助は、谷中を巡回するたびに、お仙の店に寄った。そのたびに、お仙に対する思慕が増していった。そして、ある日、政之助はお仙の両親にお仙を嫁に欲しいと言った。両親は、びっくりし声も出なかった。父親は大反対であった。しかし、政之助の熱意にとうとうほだされ、お仙を倉地家に嫁がせることにした。倉地家は、西の丸納戸頭馬場信富に仮親を頼んだ。【納戸役とは、將軍の居所である中奥に勤務した中奥番士（江戸城の本丸御殿は幕府の有った表御殿と將軍の居所の中奥と御台所様や側室の居所の大奥に別れていた）の一つで、將軍の用度の一切を取り扱う役。その納戸役のトップが納戸頭で、身分は布衣格（六位相当）で焼火の間上席で、役高は、七百石、下役は御納戸組頭が四名（旗本）、御納戸衆が二十四名（旗本）、御納戸同心六十名（御家人）がいた】

お仙は、武家でのしきたりや礼儀を馬場家で徹底的に教え込まれていた。朝早くから、掃除、洗濯そして、朝餉の支度、朝餉が終わると、信富の妻くみはお仙に、木刀を持たせた。

「お庭番の嫁は、万が一に備えて、武術を覚えていなければなりません。木刀はこう持つのですよ」くみが、自ら示した。そして、素振りをするようお仙に言って、くみはえっい、えっいと声を出して振りはじめた。なかなか、くみはやめと言わない。お仙は、汗びっしょりになり、体が右左と揺れながら、木刀を振り続けた。午後は、礼儀作法の教育。「お仙殿、襖戸は、こうやって閉めるの」くみは音もなく、一寸の隙間を閉めた。お仙も試みたが、やはりくみとは違って音が出てしまった。

「最初は、仕方ありません」くみはお仙を慰めた。

「お仙殿、畳の淵を踏んではいけません」お仙は、何が何だか分からなくなってきた。

「お仙さん、気持ちをまず込めた所作をすればいいのですよ」くみは、微笑みながら言った。

そう言われても、（あたし、本当に、武家の家に嫁ぐことができるのかしら） お仙は、滅入った。三か月が過ぎたころ、くみが、笠森に行こうとお仙を誘った。

「お母様」

「これをかぶって下さいね」 くみから紫の御高祖頭巾（おこそずきん）を渡された。

お仙はかぶり方がわからず、躊躇した。「こうかぶんのよ」くみは自分の淡い桃色の頭巾をかぶってみせた。お仙とくみは、一刻ほどで笠森稲荷に手を合わせてから、水茶屋'鍵屋'に近づいた。鍵屋には、客は、あまりいなかった。

「お仙殿、お父様とお母様に顔を見せてきなさい」 くみに言われて、お仙は戸惑ったが、背中を押されて、お仙は店に入った。

「いらっしゃい」五兵衛が言った。

「おとつつあん」五兵衛は、啞然として御高祖頭巾をかぶったお仙をまんじり見続けた。

「お仙よ、おとつつあん」

「えっ。お仙か、立派になったもんだ。馬場様のところではうまくいっているのか」

「ええ、大丈夫よ」

「時々、政之助様が俺の様子を見に来てくれる」

「そう」

「やさしいお方だ」

「おっかさんは」

「茶を買いに行っている。元気でやっているから心配ねえ」

しばらく、五兵衛の身の回りの話を聞き、五兵衛に、元気でと言って、店を後にした。くみの待っている茶屋に着くまでには、お仙は、涙を拭っていた。

明和七（一七七―）年の春、二十一歳になったお仙は、ささやかな祝言を挙げ、旗本倉地政之助（三十歳）に嫁いだ。偶然にも、南畝の結婚した年であった。政之助の屋敷は、日比谷御門外の毛利家及び鍋島家の屋敷に接していた桜田御用屋敷内の長屋であった。長屋と言っても、敷地一七七坪、総建坪六十二坪で、谷中にあるお仙の家とは大違いの規模であった。それから二十数年の年月が過ぎ、太田南畝、四十六歳の二月三日。学問吟味を受験した。心機一転した南畝は、第二回学問吟味で主席となった後、勘定奉行配下の支配勘定を務めることになった。

「お仙、南畝さんがとうとう学問吟味に受かったぞ」政之介から南畝の出世を聞いたお仙は、喜んだ。

「さすが南畝さんだわ」七月。

「お仙、帰ったぞ」

「おかえりなさいませ。あなた何かうれしいことでもあったのですか」

「殿から、払方御金奉行を命じられた」

「おめでとうございます」夫の政之助が、幕府の金庫を管理する払方御金奉行に抜擢された。御殿勘定所の勝手方掛に所属する金奉行で、払方（支出）の方を分担する役であった。政之助、お仙夫婦は、仲良く暮らしつつけた。

お仙は、次々と子を産み、とうとう九人の子を立派に育てた。その息子たちは、父に劣らず優

秀な御庭番になったと伝えられている。

文政十（一八二七）年、お仙は、七十七歳で幸せな人生に幕を閉じ、四谷の正見寺に今も眠っている。

将軍家斉の治世の寛政五（一七九四）年。春風が、両国薬研堀米沢町を歩く人々心地よく通り過ぎた。その町の一角にある高島屋は、人の出入りが後を絶たなかった。この大店は、公儀御用の巻煎餅を商売としていた。主人は、高島長兵衛、両国橋付近の興行場の多くを持つ大資産家でもあった。

店の中は、煎餅の匂いが漂う中を使用人たちは、忙しく働きまわっていた。店の奥では、長兵衛の長女お久が、出かけるためにびわ茶の三筋の小紋を身に着けているところであった。

「お久、お師匠さんの言うことよく聞くんだよ」とお久の母、富が心配そうに言った。

「おっかさん、もう少しであたし、師範になれるのよ。心配しないで」お久は、三味線を習いに出かけるところであった。この時代の町人の女性に一番人気があった職業は江戸城大奥、大名や旗本などの武家に奉公することだった。奉公は、奥女中の身の回りや雑用だったがその経験があれば、良い縁談に恵まれた。そのために芸事ができたほうが有利だったので、親は娘が幼い時から習い事をさせた。三味線、琴、踊り、茶そして花などの習い事が盛んになると女性の師匠が多く現れ、芸事で身を立てようとする女性も出てきた。お久の師匠、お安もその一人であった。「お師匠さん、お願いします」

「お久さん、今日はまず三味線の歴史から教えますよ。三味線音楽興隆の祖と言われているのは石村検校という人です。最も古い楽曲としては、数十年前、江戸の初めてのころに完成されたと考えられる‘三味線組歌’があります。また、この時代では長歌が誕生しています。これらは小歌曲をいくつか連ねた形式だが、やがて飽きられ、元禄の頃には一貫した内容を持つ‘長歌’が作曲されるようになります。これは検校たちによって始められたらしく、作曲家として浅利検校、佐山検校などが有名ですね」お安は一息ついた。

検校とは、盲官の最高位の名称で、室町時代に検校明石覚一が『平家物語』をまとめ、また、足利氏の一門であったために室町幕府から庇護を受け、当道座を開き、検校は当道座のトップを務めた。江戸幕府は盲人が当道座に属することを奨励し、当道組織が整備され、寺社奉行の管轄下ではあるがかなり自治的な運営が行なわれた。検校の権限は大きなものとなり、社会的にもかなり地位が高く、当道の統率者である惣録検校になると十五万石程度的大名と同等の権威と格式を持っていた。当道座に入座して検校に至るまでには七十三の位階があり、検校には十老から一老まで十の位階があった。当道の会計も書記以外はすべて視覚障害者によって行なわれたが、彼らの記憶と計算は確実で、一文の誤りもなかったという伝説がある。また、世襲とはほとんど関係ないため、平曲、三絃や鍼灸の業績が認められれば一定の期間をおいて検校まで七十三段に及ぶ盲官位が順次与えられた。しかし、そのためには非常に長い年月を必要とするので、早期に取得するため金銀による盲官位の売買も公認されたために、当道座によって各盲官位が認定されるようになった。検校になるためには平曲・地歌三絃・箏曲等の演奏、作曲、あるいは鍼灸・按摩ができなければならなかったとされるが、この頃になると、当道座の表芸たる平曲は下火になり、代わって地歌三絃や箏曲、鍼灸が検校の実質的な職業となった。最低位から順次位階を踏んで検校になるまでには総じて七百十九両が必要であったといわれていた。江戸では当道の盲人を

、検校であっても「座頭」と総称することもあった。この時代は地歌三弦、箏曲、胡弓楽、平曲のプロフェッショナルとして、三都を中心に優れた音楽家となる検校が多く、近世邦楽大発展の大きな原動力となった。

お安は、お茶を口に運んだ茶碗をおいて言った。

「磐城平藩の八橋検校さん、尾張藩の吉沢検校さんのように、お抱えの音楽家として大名に数人扶持で召し抱えられる検校もいました。長歌は江戸で歌舞伎舞踊の伴奏としても使われるようになり、長唄へと発展して行くのです。今までお久さんに教えた‘桜尽し’‘こんかい’‘古道成寺’‘花の宴’などです。まずおさらいで、‘桜尽し’お久さん弾いて下さい」

♪～飽（あ）かでのみ 花に心を尽くす身の 思ひあまりに手を折りて 数ふる花の品々に わ
きて楊貴妃（ようきひ）、伊勢（いせ）小町（こまち）、誰（た）が小桜（こざくら）や児桜（ちご
ざくら） 桃の媚びある姥桜（うばざくら） われや恋（こ）ふらし面影の 花の姿をさきだて
て 幾重分けこしみ吉野の・・・・・・・・・・・・・・・・♪ ♪雲井に咲ける山
桜・・・・・・・・・・・・・・・・ 見初めし色の初桜（はつざくら） 絶えぬながめは九重
の 都帰りの花はあれども 馴れし東（あづま）・・・・・・・・・・・・・・・・♪

「良くできました。次は、今日の練習曲です。歌の間にまとまった器楽部分を持つ曲‘さらし’です」

「はい、お師匠さん。お願いします」とお久は答えた。

♪はい チャチャン、チャチャチャ チャンチャッチャ トントンチャチャン チャンチャカチャ
ン チャ・・・・・・・・トントント・・・・・・・・♪ 「では、お久さん。いいですか」

「はい」

♪留めて見よなら～高足駄・・
♪

「よくできましたね。では今日はこれまで。おうちでよく練習してきて下さいね」

「お師匠様、ありがとうございます」 お久は、三つ指をつき頭を下げた。

梅の花の蕾が膨らみ始めた日本橋通油町界限の一角に、間口三間、奥行五間の紅絵（浮世絵）問屋の耕書堂があった。店の中では、上り框に腰を下ろした小売商の男が、店の手代と話をしており、奥では、往来物の版本の刷り上がった丁（ちょう）を揃えたり、小口を切りそろえたり、綴じたりして、皆黙々と作業をしていた。その奥の一室では、店主の蔦屋重三郎が、歌麿と何か話をしている。店主の蔦屋重三郎は、寛延三（一七五〇）年、吉原に生まれ、二十三歳の時に、吉原大門口近くに書店を開いた。売れっ子の武士作家、朋誠堂喜三二（ほうせいどうきさんじ）の黄表紙『見徳一炊夢』を出版したのを手始めに本格的に出版業を拡大した。そして十年後、一流版元の並ぶここ日本橋に進出し、店は繁盛し始めた矢先、寛政の改革の風紀取締りにより、重三郎は過料という処罰（罰金）を受け、店はあっという間に傾いた。しかし、持ち前の才覚と人格によって、店を立て直した。今では耕書堂は、蔦屋と呼ばれている。

「歌麿さん、どうも絵に生気がありませんな」 重三郎が、歌麿の描いた絵を見て言った。歌麿は、吉原の花魁（おいらん）たちや、坂東玉三郎たち歌舞伎役者の絵を描いているのだが、最近何か物足りないと自分でも感じていた。重三郎は、鈴木春信の描いた笠森お仙の画を歌麿に

見せた。

「歌麿さん、春信のような素人娘を描いてみたいと思いませんか」と、言った。

「今時、どこにこのような美人娘がいますか。いたら、是非描きたいですね」そのような話もいつのまにか歌麿は、同じような仕事に忙殺され、忘れ去っていた。歌麿は蔦屋から菱川師宣、鈴木春信そして勝川春章の絵を見せてもらい、いろいろ考えさせられた。師宣の野暮ったい泥くささ、春信の一つあか抜けなぎこちなさを何とか打破するようなものがないかと。

「歌麿さん、師宣さんや春信さんの悪い所を、改善したら如何でしょうか」歌麿は、蔦屋の言ったことに納得して、いろいろ試作を繰り返した。まずは、美人画で全体の姿を描く場合だが、顔はうりざね顔、首は細く、体は華奢で細身の九頭身、手は小さくすることにした。構図を大体決めたので、若い美人の娘を探しに毎日、町に出て行った。

ある日、偶然にもお久の三味線の稽古帰りに出会った。小袖は、青茶の地に小桜の小紋、燈籠鬢の潰し島田の髪にビラビラ簪（何本かの鎖や小短冊を垂らしたもので、歩くたびに揺れる姿が若い女性にこの頃好まれていた簪である）すべてが似合っていた。気のついた時には、歌麿は、両国の高島屋まで来てしまっていた。（巻煎餅で有名な大店の娘さんか）とつぶやき、隣の煙管屋に入って煙草を買いながら高島屋の娘のことについて、いろいろ聞き、高島屋の一人娘お久であることを知った。歌麿は、高島屋に入った。煎餅の香りが、歌麿の全身に漂った。（なんといひ香りなんだ）しばらく、その香りに酔いしれてしまった。

「お客様」

「・・・」歌麿は、我に返って、声をかけてきた丁稚らしき男に、浮世絵師の喜多川歌麿と名乗った。

「ご主人に会わせてくれませんか」

「何のご用でしょうか？」

「いや、ここの御嬢さんのお久さんのことで」

丁稚は、不審そうに奥に入って行った。しばらくしてから、長兵衛が奥から出てきて、何かうちの娘に用かと歌麿に怪訝そうに尋ねた。歌麿は、長兵衛にお久の美しさを浮世絵の題材にしたいと懇願した。長兵衛は、困った顔をして、お久に聞いてみるのでここで座って待っているように言って、奥へ行った。しばらくして、長兵衛は、富とお久を連れて戻って来た。

「歌麿さん、お久が受けるそうです」と長兵衛が苦笑いして言った。お久は乗り気な顔をして、「歌麿先生、どうぞ、よろしく願います。」と頭を下げた。ビラビラ簪が、輝きながら揺れた。歌麿は、なんて笑顔がかわいらしく、またふっくらした美人なんだろうとしばらく、見惚れてしまった。毎日のように歌麿は、高島屋に出向いてお久を描き続けた。ある日、いつものように歌麿がお久を描いていた時、お久が急に歌麿に生い立ちを聞いてきた。

「私は、宝暦三（一七五三）年生まれで、四十一歳、本名は北川勇記といいます。狂歌名は筆綾丸です。絵の世界に入るため、狩野派の島山石燕先生に師事したのですが、狩野派の様式を逸脱した絵を描き続けたら破門されまして。それからというもの、ずうっと干されましたよ。三十歳ぐらいに、今お世話になっている蔦屋さんに偶然お会いしまして、仕事をもらいました。最初は、黄表紙に‘身なり大通神（みなりだいとうじん）略縁起’の挿絵です。あ、お久さん、ちょっと横

を向いてくれませんか」

お久は、横を向きながら言った。

「先生は結婚しているのですか」

「結婚していました」

「え、今はどうされているのですか」

「一昨年、仏様があの世に連れて行って・・・」歌麿の目にかすかに涙が浮かんでいた。歌麿の妻‘おりょう’を築地の旗本の家と呼ばれて行った時、一目見て歌麿の心にときめきという衝撃が走った。生まれて初めての事であった。それから数年片思いが続いたが、とうとうおりょうは歌麿の思いに絆され、嫁いだ。売れない絵描きだったが、歌麿はいつでもおりょうにやさしかった。我に返って、歌麿は筆を走りはじめながら言った。

「お久さんにはいい人いるんですか」

「いませんよ、先生」

「お久さんならきっといい人見つかりますよ」

「そうならばいいんですが」

「出来ました。どうですか」と歌麿はお久に下絵を見せた。

「綺麗、これに色が入ったら、素晴らしいでしょうね」その下絵は上半身を大きく描く【大首絵】だった。不必要なものを一切省略して、描きたい顔だけを主に構成した構図で左手が首襟に添えられているのが、何とも艶かしいお久であった。数日後、「高名美人六歌撰高島お久」という題名で版元の蔦屋から売り出されたが、一日で売り切れた。あまりにも売れるので、蔦屋は、二版、三版と増刷した。歌麿もこんなに売れるとは思ってもよらなかった。当のお久は、ちょうどその頃、高島屋の出した茶店を手伝い始めた。大変な人気で、連日、客足が絶えなく男たちが茶を飲みに来た、そして本店で作った巻煎餅も注文された。まさかこんなに繁盛するとは、長兵衛も富も驚いた。

「歌麿さんのおかげでこんなに繁盛するとは、ありがたや、ありがたや」と長兵衛は富に言った。

しかし、それとは別にお久に言いよる男も数多くなってきたので、富は心配になって来た。そんな時、お久に浅草虎屋から結婚の話が舞い込んできた。虎屋は、次男信吉を高島屋に婿に出しても良いというのだった。長兵衛も富も、たいそう乗り気になった。長兵衛はお久にそのことを夕飯の時に伝えた。

「信吉さんは、なかなか頭もよくやさしい男との噂だが一度会って見ないか」と長兵衛は言った。虎屋は和菓子を扱っている老舗であった。「信吉さんに一度会ったことがあるけど、いい人そうよ」と富も言った。

「おとつつあん、おっかさん。明日でも虎屋さんをそっとのぞいてみますわ」と、お久は嬉しそうに言った。

翌日、お久はお高祖頭巾をかぶって、乳母の勝と浅草の虎屋に向かった。浅草は両国とは異なり、お久を見て振り向く人もほとんどいなかった。虎屋に着いて、菓子を買うふりをして店の中に勝と入った。店の中は、ごった返していた。長兵衛に聞いてきた信吉の特徴を思い浮かべて

、店内を見回したが信吉らしき若い男は見当たらなかった。「お勝、店にはいないようね。かえりましょうか」とお久は肩を落として虎屋を出た時、体のごつい男にお久がぶつかった。

「おい、娘、てめえどこを見て歩いているんだ」と酒をぶんぶん臭わせて怒鳴って来た。

「すみません」と言って、お久とお勝は頭を下げた。

「土下座して謝れ」と男は後に引かない。いつの間にか、お久達の周りに、人垣ができていた。男がやくざ風なので、物見の人たちはただ見ているだけであった。お久は、おろおろして体に震えが来た。

「てめえ、なんとか言え」と更に声大きくしてお久に言った。

「ちょっと、お兄さん。お店の前で、娘さんをいじめるなんぞやめて下さい」と若い男がお久の前に割って入って来た。「おい、若いの。この小娘が俺にぶつかってきて、謝らないんだぞ。この娘が悪いんだ」

「いや、さっきこの娘さんとお供の方は謝ったじゃないか」

「こんな痛い目にあって、土下座してもらわなきゃ許さねえ」

「困った兄さんだね。お金がほしいのかい」

「なに、俺を見損なうんじゃないぞ。俺を誰だと思っているんだ。浅草の鉄だ」

「申し訳ありません、鉄さんですか、存じていません」

「おまえは誰だ、一体どこの馬の骨だ」

「私は虎屋の者で、名は信吉です。」

「うっ、小娘。今日はこの信吉とやらに免じて、許してやらあ」と捨て台詞をはいて背を向けて去って行った。

「どうもありがとうございました」とお久は頭を下げ、自分の名を伝えようか伝えまいかと悩んだ。そんなこと、お構いなしに、

「いやいや、あいつは酒を飲むと人間が変わって、すぐ頭に血が上る輩なんですよ。地は決して悪い人間ではないらしいのですが。まあ、どちらにしても、何もなくてよかった。気をつけて、お帰り下さい。では失礼」と、信吉は虎屋の中に入って行った。お久は帰って、因縁をつけられ信吉に助けられたことを長兵衛と富に話した。

「それは良かったね。じゃあ、虎屋さんのご主人に、信吉さんをうちの婿さんにとお願いしていいんだね、お久」と富は嬉しそうに言った。

「もちろんですよ。おっかさん」 お久は嬉しそうであった。

「よかった。これでうちも安泰だ、本当に良かった」と長兵衛は繰り返し言った。翌日、歌麿がお久を描きに来た時、「先生、わたし祝言あげますの」とお久は、嬉しそうに言った。

「それはおめでとうございます。虎屋の信吉さんですか。それはお似合いだ」何かちょっとさびしように言ったのには、お久は気がつかなかった。そして、一か月後、二人は盛大な祝言をあげた。二人はお似合いの夫婦と、祝言に来た人々たち皆が言い、羨ましがった。長兵衛も富もそして、虎屋の親たちも祝言に来た人たちに何回も廻って、酌をした。信吉は高島家に入って来た一日目に、長兵衛は信吉を奉公人に引き合わせた。番頭の弥平と六人の奉公人に向かって、信吉は「よろしく申し上げます」と言って頭を下げた。お久も一緒に頭を下げたので、皆驚いた。お

久と信吉は毎日、仲睦まじく過ごした。数日後、お久のところに、歌麿が絵を持ってきた。

「お久さん、どうですか」と歌麿は風呂敷から絵を出した。

「先生、すごく綺麗ですね」とお久は吃驚した。

「ちょっと、信吉さん、呼んでくるから待って下さい」とお久は走って、部屋を出て行った。

「これは見事だ、歌麿さん」と信吉も驚いた。「これはわたしですね、この二人はどなたですか」とお久が聞いた。

「はい、真ん中の方は富本の豊ひなさん、浄瑠璃富本節の名取で吉原の芸子さんです。そして右の方は難波屋のお北さんです、ちょっと大柄で愛きょうのある人です。この絵を“寛政の三美人”と名付けました。明日売り出されます」と歌麿は嬉しそうに言った。翌日売り出され、あっという間に完売、それからというものの蔦屋は二版、三版と増刷に多忙であった。

両国は、賑わっていた。薬研堀米沢町に入ると、♪朝顔やあ～、朝顔。朝顔やあ～、朝顔♪の売り声がどこからともなく、聞こえてきた。歌麿は、高島屋に入った。

「歌麿さん、いらっしゃいませ。ちょっとお待ちください。女将さんと呼んできますから」店の女が、笑顔で迎え、お久を呼びに奥に行った。しばらくして、お久がやって来て、歌麿を奥の部屋に案内した。

女中が、茶と巻煎餅を歌麿の前に置いて、頭を下げ部屋を出て行った。

「これ、お二人へのお祝いです」歌麿は、二人の祝言の絵をお久と信吉に見せた。

「綺麗！」

「歌麿さん、ありがとうございます」信吉は、笑みを浮かべ頭を下げた。

お茶を召し上がってくださいとお久が言った。

「巻煎餅、美味しいですね」お久は、歌麿に乞われて、しばらくの間、巻煎餅の由縁や作り方について喋った。九ツ刻（十二時）を知らせる鐘の音が流れてきた。

「歌麿さん、いらっしゃい」長兵衛と富が部屋に入って来た。

「歌麿さん、昼いかがですか」長兵衛が、誘った。歌麿は、有り難くいただくと言って頭を下げた。お久は、すぐに席を立ち勝手場に向い、勝手場の女中頭に歌麿の膳も出すように頼んだ。

女中たちが、めざし鯛の焼き物、きんぴら、そして吸い物が載った箱膳を歌麿たちの前に置いた。

歌麿は、一刻（二時間）ほどして、そろそろ歌麿が席を立った時、思い出したように、「そうだ、今度皆さんとお食事をしたいと、蔦屋さんが伝えておいてくれと言っていました。また、連絡します」と言った。お久は、蔦屋さんの分もと言って、お土産に巻煎餅を歌麿に持たせた。

高島屋は午後になると客足が、更に増えお久たちは、目が回るような忙しさにもめげずに、働き続けた。暮れ七ツ（午後四時）、後片付けをしながら店を閉めた。店の男たちは、店の片づけを、女は、夕餉の支度をした。長兵衛、信吉そして番頭たち店の男たちが、居間の席に着いた。既に、八杯豆腐、香の物そして、吸い物そして、飯が箱膳に用意されていた。「いただきます」と長兵衛が最初に手を合わせ、皆がそれに続いた。四半刻（三十分）で店の者たちは、食べ終わり、部屋に戻って行った。いつものように、家族の四人だけが居間に残り、くつろ

いだ。お久が運んできた茶を飲みながら、長兵衛が言った。

「歌麿さんは義理堅いお人だね」「本当に、いい人」富が相槌を打った。

「お久が、本当にきれいに描かれています」信吉が、笑みを溢しながら言った。そして、また

「そういえば、もう初夏です、おとつあん、おっかさんと大山詣に行ってください」信吉は、以前から富が大山詣に行きたい、行きたいと言っていたのを思い出して、言った。

「そうよ、江ノ島もついでに行ってきたら」

「お久も一緒に行ったらいい」

「えっ、あたしも」

「親子水入らず、たまにはいいですよ。おとつあん」長兵衛も富も喜んで、信吉の勧めを承知した。信吉が、両親を大切に扱ってくれるので、お久は嬉しかった。

明け七ツ刻（午前四時）、着替え用着物、足袋、頭巾、枕、油紙雨具、藁籠、手燭、たたみ提灯、矢立そして火打道具等を携えた三人と見送りの信吉が、店前に立っていた。まだ、空には星が散々と輝いていた。心地よい風が、通り過ぎて行った。

「信吉、後はよろしく頼むよ」長兵衛は、声をかけて歩き始めた。

「お気を付けて」信吉に見送られ、お久たちは江の島に向かって旅立った。日本橋、品川宿を通り過ぎ、夜が明けてきて、右手には御殿山が迫っているのがくっきりと見えた。

「この辺は、三代将軍家光様が沢庵和尚の東海禅寺を訪ねた折、帰りに沢庵和尚が、街道近くまで家光様を見送りに来たんだが、その時、‘海近くして、東（遠）海寺とは如何’と聞かれたそうで、それに対して沢庵和尚が‘大軍を率いて将（小）軍という如し’と答えた場所だ」と長兵衛が、二人に歩きながら説明した。

「禅問答ですね」お久が答えた。

「沢庵漬けの和尚さんね」富が言った。（現在、この付近に‘問答河岸’の碑があります）街道脇の品川（ほんせん）寺を通り過ぎ、鈴が森刑場に一行が出た時、女たちは顔をそむけた。（今では想像できない、幅広い道路際にその跡があります）

「舟が出るぞ〜」船頭の声で、お久たちは、走って六郷の渡しの船に乗って、江戸に別れを告げた。同じ船に、浪人らしき侍が二人、三味を抱えた女が同乗した。四半時ほどで川崎宿を通り過ぎた。丘の上に上がって、三人は、富の作った握り飯と煮物の弁当を背から降ろし、開けた。山側には、富士が見えた。

それから三里ほど歩き、神奈川宿に入った。並木町、新町、荒宿町、十番町、九番町、仲之町、西之町と続いて滝野川を渡り、滝之町から上台町、軽井沢といった町を通り過ぎた。本陣は石井本陣が西之町に、鈴木本陣が滝之町にそれぞれ立派な建物が街道に迫っていた。

「ここで泊まっていこうか」長兵衛が二人に言った。‘浜千鳥’と書かれた行灯の旅籠に入った。

「三人さん、いらっしゃいませ」女が三人を迎えた。

男たちが、水の入った盥（たらい）を框に腰かけたお久たちの足の前に置き、三人の足を濯いでくれた。程ヶ谷宿を過ぎ、戸塚宿で三人は、一膳飯屋で蕎麦を食べた。「ここから、’中

ノ道'に入り、鎌倉に出ようか」長兵衛は、茶を飲みながら言った。 昼八時半（三時）、北鎌倉の山ノ内（やまのうち）に出た。建長寺・円覚寺・東慶寺・浄智寺・明月院そして、長寿寺に詣でた。立ち札に、'足利基氏が父の足利尊氏供養のため、開山に古先印元を迎えて建てた。尊氏は延文三年(一三五八)没す。この年、建立。尊氏の法名が長寿寺殿といわれたことから、名付けられた」と書かれていた。 疲れた三人は、寺前の茶店に入った。煎餅が籠に入って軒から下げられていた。お茶を運んできた老婆に、長兵衛は、甘口の煎餅を、富は柚子、そしてお久は、青じその煎餅を頼んだ。

「おいしい」お久が声を上げた。

「まあまあだな」

「おいしいわ」煎餅にはうるさい三人が、ほめた。

「ありがとうよ」老婆は、何の表情も変えずに言った。

ごちそう様と言って、富が老婆に十八文払った。そして、三人は腰を上げ稲村ヶ崎に向かって歩き始めた

「お気をつけて」と老婆が見送った。

浜辺近くの道を歩き一刻（二時間）ほどで、江ノ島大橋に三人は佇んだ。

「江ノ島よ！」お久は、思わず声を上げた。橋を渡り、銅製の鳥居の前に来た。

「お久、この鳥居の建立に、私も寄進したんだよ」鳥居の右の柱に高島屋長兵衛と刻まれているのを富が見つけた。「嶋屋の利助さんよ、おっかさん」三人は、いろいろ知っている名前を見つけては、喜び、その人たちの話に花を咲かせた。

「もう、陽が暮れてきたから、そこの旅籠に泊まろう」

「あっ、おっかさん、夕陽がきれい」「本当、富士山も綺麗」三人は、四半刻ほど夕陽に染まる富士に見とれていた。

「さあ、行こうか」長兵衛が歩き始めた。そして、坂道を多少上がったところにある旅籠に入った。三名様、いらっしゃいと旅籠の女が大声を出した。 框に腰を下ろし、盥水で三人足を洗ってもらい部屋に案内された。 女は、行灯に灯を入れた。そして、風呂にするか、食事にするか、長兵衛にたずねた。

「風呂にしますよ」と長兵衛が答えた。

お久と富が先に風呂に入った。 そのあと長兵衛が入り、部屋に戻った時には、夕餉の支度ができていた。 箱膳には、さざえの壺焼き、生しらす、真鯛（まいわし）の焼き物、香の物が置かれていた。

「ご馳走だな、生しらすはなかなか江戸じゃ食べられんな」と長兵衛が言った。

「あなた」富は、銚子を持った。長兵衛は、富の酌を受けた。

「この近海でとれたものばかりですので、お客さんのお口に合うかどうか」 女は、お久と富の飯をよそりながら言った。お久は、料理に手を付けた。

「美味しい」お久が声を出した。

「本当、美味しいですよ」富も言った。 ありがとうございますと女は微笑んだ。

旅の疲れが出たせいか、三人はいつもより遅い明け六ツ刻に目を覚ました。相州の海と空は真

っ青だった。蛤の味噌汁、焼鮓、香の物で朝餉を取り、旅籠を出た。坂を上り、辺津宮（へつみや）、中津宮（なかつみや）そして、奥津宮（おくつみや）にお参りした。江島神社（えのしまじんじゃ）は、宗像三女神が祀られている。お久は、今の幸せがいつまでも続くように祈った。そして、三人は岩屋に向かって、下り道を降りはじめた時、手摺に体をゆだね、絶壁に向かって前かがみになっている若い娘が、お久の目に入った。

「何やってんの！」驚いたお久は、大声を出しながら走った。長兵衛、富も後を追った。

「死なせて」娘は、泣きじゃくった。

「馬鹿言ってるんじゃないの」お久は、娘の足を掴んだ。長兵衛は、体を持った。

「娘さん、どんな事情があるかわかりませんが、死に急ぐことはありません。落ち着きなさい」と長兵衛は言って、娘の頬を打った。娘は我に返って、泣き止んだ。

「差支えなかったら、理由聞かせて」富が諭し、そして落ち着いてきた娘を近くの岩に座らせた。三人は、娘の話聞いた。藤澤宿近辺に住んでいて、毎日、夫は朝から酒を飲んで、暴力をふるうのだが、今日は、ヒ首を振り回すもので、とうとう逃げ出して来た。「もう此処まで追われてきたら、もう死ぬしかないと決めた」といって、涙ぐんだ。「追われているんだな、早く逃げないと」長兵衛は、周りを見回した。

（細かいことを聞いてもしょうがない、この娘を何とか逃がしてやろう）

「岩屋から舟に乗って大橋に戻ろう。富、お前先に行け。お久、娘さんを見てくれ」と言って、長兵衛が三人を前にやった。

四半刻ほどで、三人は坂を下りた。

「そこに船乗り場がある、弁天様はまただ。早く」

「船頭さん、早く行ってくれ」長兵衛が、船頭に、一朱金（約四千元くらい）を渡した。

「へい」船頭は舟をこぎだした。舟を降りて、長兵衛は、近くにいた駕籠かきに言った。

「駕籠屋さん、この娘さんを鎌倉の東慶寺まで載せて行ってくれませんか。これをお願いしますよ」と、二朱金を渡した。

「へい、承知いたしました」二人の駕籠かきは、すぐに娘を駕籠に乗せて行った。しばらくそれを見送って、お久たちは、一里九町（約五キロ）の道のりを歩き、半刻ほどで、藤澤宿に入った。早速、飯屋に入った。簡単な菜飯を食べた。

「ここから、大山までどのくらいあるのかしら」お久が、長兵衛に聞いた。

「四ツ谷（神奈川県藤沢市）から田村通大山道に入って、一ノ宮（高座郡寒川町）、田村の渡し（相模川）、横内（平塚市）、下谷（以降、伊勢原市）、伊勢原、ノ引、石倉、子易、そして大山。六里ぐらいあるかな。今日は、田村あたりで宿を取ろう」大山道のような街道を五街道（東海道、中山道、日光道中、奥州道中、甲州道中）に対して、脇街道あるいは脇住還と呼ばれていた。五街道は、道中奉行（大目付と勘定奉行各一名の兼任）の管轄下で、脇住還は、勘定奉行の管理下であった。田村で一泊して、翌日、お久たちは、白衣姿で大山の阿夫利(あふり)神社に詣でた。

大山は、高さ四百十七丈（一二五三メートル）。山頂に大山阿夫利神社がある。神社の説明の立札には

「創立は、今から二千二百余年以前の人皇第十代崇神天皇の御代であると伝えられている。天平勝宝四年（七五二年）に良辯（りょうべん）大僧正が入山してようやく不動堂建立以来の時運到来、神仏習合の機が熟し、堂塔僧坊を建て、霊石の由縁をもって石尊大権現と称し、雨降山大山寺と号とした。撰社には、古くから大天狗・小天狗が祀られている」と書かれていた。

朝七ツ、旅籠を三人は後にして、矢倉沢往還（やぐらざわおうかん）に出た。江戸まで十八里（七十二キロ）。長津田（横浜市緑区）の人馬継ぎ立場で、お久と富は馬に乗った。そして、荏田（横浜市青葉区）を過ぎ、溝口（川崎市高津区）で宿を取った。現在は、この旧往還に沿って国道二四六号が通っている。国道は、渋谷へと続いている。朝、三人は、六ツに旅籠を出た。半刻（一時間）ほど歩いて、‘二子の渡し’（ふたごのわたし）に出た。

「おっかさん。富士山が、綺麗にみえるわ」お久は、富に振り返った。ここの渡し船は、人を渡す船はもちろん、馬や荷車を渡す大型の船も用意されていた。川を無事渡った三人は、三軒茶屋（世田谷区）そして、陽が傾き始めた暮れ七ツ半頃(午後五時)両国の家に着いた。

「お帰りなさい。みんな真っ黒になって」 信吉が、裏の木戸を開けて迎えた。

一年後、お久は長次郎をそして、三年後、直吉を産んだ。お久は、仕事熱心な信吉と二人の子と幸せに過ごし、店も繁盛した。長次郎が六歳になった。すっかり、両国界隈も秋めいてきた。朝五ツ半（午前九時）、お久が暖簾を掛けに外へ出た時、急に眩暈を感じた。危ないと感じ、座り込んだ。（目が回っているんじゃないわ。地震よ）お久は、力を振り絞って、何とか店の中に入った。

「お久、地震だ。大丈夫か」 信吉がお久をみて、どなった。

「あなた、長次郎たちが・・・」とお久は言って、長次郎たちの部屋に入った。棚から玩具や絵本がバラバラになって落ちていた。

「おっかさん、怖いよ」長次郎が泣き出した。

「長次郎、直吉、もう大丈夫よ」 お久は、二人を抱きしめて言った。 ゴーと音がするや、ガタガタとまた、揺れだした。 地震計などない時代だが、文献では、マグニチュード六、六、震度Ⅴ弱位の地震であったようだ。

「お久、子供たちは大丈夫か」 信吉が、息を切らせてやって来た。「尾上町の方で火の手が上がったぞ、風向きがこっちだから、逃げる支度をした方がいい」

ここ米沢町から近くの墨田川に架かった両国橋を渡った向こうに、尾上町がある。

「おとっつあんとおっかさんは、どこ」 すぐ探してくるからと言って、信吉は、部屋を出て、長兵衛たちの部屋に入ろうとして、戸襖をあけようとしたが、開かない。「おとっつあん、おっかさん。大丈夫ですか」

「信吉さんか、早く助けて～」と富の声がした。 信吉は、戸に体当たりした。長兵衛は和筆筒、富は、茶筆筒の下敷きになっていた。 信吉は、長兵衛に大丈夫かと大声を張り上げたが、返事が戻ってこない。

「おっかさん、大丈夫ですか」と言いながら、富の足の上に倒れた筆筒を持ち上げた。富は、足を引きずり這いながら、長兵衛が横たわっているに行った。

「あなた、あなた・・・」富は、長兵衛の手を握った。

信吉は、箆筒から着物を出してから、長兵衛の上に倒れた箆筒をどけた。 富が、血だらけの長兵衛の顔を持ち揺すった。

「おっかさん、ここから出ましょう。尾上町が火事になってます。早く支度を」 富は、信吉に長兵衛を大八車に乗せて、一緒に逃げるように頼んだ。

「はい」 二人は、お久の部屋に行った。

「おっかさん。・・・おとつあんは」 お久が、荷をまとめながら言った。

昼には、町民たちが、荷車にものを乗せて、両国橋から少しでも遠くに行こうとひしめき合っていた。 に組の町火消連中がやって来た。纏を持った火消が先頭にそして

、梯子、長鳶、掛矢、大鋸を持った鳶たち、そして、竜吐水と水鉄砲をひく者おす者が続いた。

頭領が、大声で怒鳴った。

「火が来るぞ、早く逃げろ。もたもたすると、焼けちまうぞ。あとは俺たちに任せろ」

信吉と店の者が、長兵衛と富を大八車に乗せた。また、手すきの者が、もう一台の車に荷に乗せた。

「若女将、お子らもこの車に乗せましょう」 お久は頷いて、長次郎と直吉を荷台に乗せた。

「さあ、行きます、いいですか」 二台の大八車が、ゆっくりと走り始めた。

「あなた、何とか言って」 富は、横に寝かされている長兵衛に泣きながら繰り返し言った。

お久は、荷車の横について行った。 しばらくして、お久が前に行く信吉に大声で言った。

「両国橋に近い米沢町の一角の家々が、町火消たちの手で壊されているわ。お店も・・・」

米沢町から半里（二キロ）離れたところにお久たちは逃げて来ていた。二刻（四時間）ほど経って、空には、煙だけが立ち昇った。「火事は収まったようだ、おいらちよいと店見てくるよ」 信吉が、お久に言った。

高島屋の建物は、無事だった。両国橋近くの建物が数件壊されていた。風向きが変わったのが幸いした。

店の中は、壁や土間に亀裂が入ったり、天井が落ちたりしていた。商売道具の竈も壊れ、鍋、釜も土間に散在していた。（これらを、修繕して店を開くには時間がかかるな） 信吉は、戸を閉めて、お久たちを迎えに戻った。とうとう、長兵衛は三日後の夜、帰らぬ人となった。富は、左足を引きずって歩くようになってしまった。 両国橋近くでは、お救い小屋が建てられ握り飯と味噌汁が家を失った人々に配られていた。 お久は悲嘆にくれながらも、信吉と、朝から晩まで店の立て直しに心血を注ぐ毎日を送った。

三か月もたつと、高島屋に賑わいが戻った。お久は、高島屋の女将として板につき始め、評判は上々だった。また、信吉には献身的に尽くす良き妻でもあった。 二人は、幸せに毎日を過ごした。お久は、二十九歳になった。この夏頃から、咳が時々始めた。そして、喀血してから、床に臥せてしまった。 医者に見せると、疲れから来たもので、安静にして滋養のあるものを食べれば直に治るとの見立てであったが、信吉の介護にも関わらず、少しも容態は良くならなかった。 とうとう、信吉や富たちに見守られて、お久は三十数年の命を閉じた。長次郎十歳、文化十一（一八一四）年、お仙の半分の人生であった。 信吉は、お久からの悲しみをまぎれさそうと、身を粉にして働いた。 歌麿もお久の後を追うかのように、その年、五十四歳で鬼籍に入った。

五年後、長次郎は、信吉の後を継ぎ、高島屋の主となった。それから、信吉は、お久の墓参りを毎日欠かすことはなかった。

二百年後の今も、大江戸三大美人として、歌麿の描いた浮世絵の中でお久は、なお生き続けている。（完）

四の巻（一）

四の巻 柳屋お藤

（一）

江戸浅草寺奥山の銀杏下に楊枝の店柳屋があった。その家に勤めているお藤は、笠森お仙と並び称される美人として、評判を集めていた。

大田南畝は、頭を抱えていた。『小説売飴土平伝（あめうりどへいでん）』という狂詩文の版本に「阿仙阿藤優劣弁（おせんおふじゆうれつのべん）」という戯文を添えて、二人の美女の容貌を比較し、論評を書こうとしていた。

「明日、もう一度お藤にあつて来よう」

南畝は、筆をおいて布団の上にひっくり返ってしばらく考えていたが、いつの間にか寝込んでしまった。

今、浅草寺界限では、

「用事(楊枝)ないのに用事をつくり、今日も朝から二度三度」とお藤の店にむらがる人々の歌がもてはやされていた。

『江戸名所図会』の「浅草寺」に、店の説明付きの挿絵が載っている。「境内楊枝を鬻(ひき)ぐ店、甚多し柳屋と称するものをもて本源とす、されど今は其家号を唱ふるもの多く、竟(つい)に此地の名産とはなれり」

この後「口臭からず」など商品の五つの効用を挙げている。当時の楊枝は、爪楊枝というより現在の歯ブラシみたいに使われていたものと思われる。しかし、楊枝商売は表向きで、ほとんどの店は若い女性が接客に当たり、色を売り物としていたが、柳屋は、堅実な商売をモットーとしていた。

大江戸 美人揃

<http://p.booklog.jp/book/30904>

著者：落書 福太郎

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/dew720yar/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/30904>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/30904>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ